

を論じるのは、ドストエフスキーやニイチェやモーリアックを論ずるのにバイブルを参照しない
のと同じだろう。とわたしは感じる。論者が孔子主義者であろうとマルキシストであろうと。い
かがであらうか。

王論文は文論文よりおくれて出、その趣旨は酷似しながら、文論文にひとことも触れない。こ
れはどういうわけだろうか。筆者が書きもらしたのなら発表紙の編集者が賞書をつけてよかった。
両方が無署名の文章なら話は別だが。

(十二月十一日)

二〇世紀の李賀

1975.12.11

斎藤 暁 (その二)

昭和五十年六月二十日、斎藤暁『李賀』の第六版が出た。昭和四十二年九月三十日に初版が出
て以来八年。わたしは初版と第五版をもっていたが、この記事を書くために第六版を買った。し
かし第六版は第五版とかわりがないように見つける。この本についてわたしは折にふれて書い
てきたが、ここで多少の重複をいとわず感想をのべる。それが種々学恩を受けたこの本への著者
へのわたしの感謝になろうかと思うからである。

鈴木虎雄『李長吉歌詩集』と斎藤『李賀』は今日における李賀のスタンダードだと、わたしは

信じる。残念なことに鈴木のは出版社が刷版を重ねない。現在、新たに李賀のスタンダードに接しようとする人のまえには斎藤のしかない。わたしたち後進はスタンダードを乗りこえるのが先進の開拓に対する唯一の謝恩だが、まだとてもこの二先進の作業を通してはいない。たえずここに立ちもどって養いをえては新たに鼓舞されてたどしく羽ばたくのだ。

本書は初版・五・六版ともにページ立ては変っていないので、ページを追って愚感を記す。

巻頭口絵の「姚佐本李長吉葉可解定本」は入手しがたい。わたしは荒井健氏の尊意で一談したが、どこかの本屋さんが復刻してくれると李賀同好は喜ぶだろう。

Simons (P₁) は Synnocs の誤りだろう。八李賀は小さいながら、李白や杜甫のできないことをやったと私は思う。まったく別の領域、近代感覚のそれにも通ずる新しい道を切り開いた独創的詩人だと私は思う。Vに九分通り同感である。(P₂)

八隋西は唐の皇室の祖先の出たとこそV (P₃) 隋西は唐の皇室がその祖先の出身地と称したところ、というほうが正確だろう。拙稿「李神道」補遺一

八彼は……昌谷に生まれたV (P₄) 昌谷に家屋した、というべきだろう。拙稿「鼻新」八少年にして詩文をよくし……宗工はこれを争いとして管絃に合わせV (P₅) そういう伝えはあるが、断定はできぬ。拙稿「三長吉」

八本邦の註釈家たちは藤原によつて奉礼郎に任ぜられたように記しているが、賀の近い華族には藤原のもとになるような人物は発見されないV (P₆) 賀の父李晋肅はヒ九三年に陳県令であった。陳は望鼻だからその令はたぶん望鼻と同じく正六品上か、あるいは京県令の正五品上に数じる

待遇を受けたであろう。その死が八〇八とすれば十五年あるわけだ。一階ないし数階上までいたであろう。この推測が許されるなら、賀が父の陰謀によって奉礼郎に任ぜられたと考へ得る。

八長吉の姉は王家に嫁いでいる（王参元が王恭元の妻になったのであろう）。ところが、商隠はその王家の大立物で当主である王茂元の娘を娶っている。従って李商隠は李賀と近い縁戚になつていたわけだ。V（p. 13）これは注目すべき説だ。わたしはまだ追跡する暇を得ないが、その可能性は充分あるうと感ずる。李賀と沈述師・沈亞之との關係から類推して。

八白樂天と同時に進士に及第した戴叔倫は……李賀を情人と呼んで、なつかしさゝを表明しているV（p. 15）この説は誤り。拙稿「三長吉」

八李賀年譜V（p. 16-20）七九一年に「權徳輿太常博士に除せらる」七九三年に「賀の父晉陽陝東の令として邵伯祠改修に従事」を入れた。八〇三年八韓愈……陽城令に貶されたVの城は山の誤り。八〇七年「正月、武元衡・李吉甫宰相となる」八一三年、宰相權徳輿免職のあとに「東都留守となる」を入れた。

八李賀古歌詩叙V（p. 23-30）その全部について拙稿「杜序」荒井健「杜牧」なお八韓吏部（吏部尚書）Vは、吏部侍郎の誤り。

この書のテキストは王琦注本に拠っているようだが、宣城本を底本にすればよかった。校記に宣城本はあげられているが、一々には當っていないと察せられるところがある。しかし「校本李賀集」をまた作っていないわたしとしては、批判として言うわけにはゆかぬ。

八・殘絲 名二川の遊糸（いとけう）・遊糸とは、くもや小虫など始めてかえたときについ

ていた細い糸が無数に空中に飛びただようもので春の景物になっている。中国では珍しくないが日本では比較的すくないので、よく陽炎へ水蒸気的作用で生ずる現象、かげろうのこととまちがえられている。この説に接したとき目の醒める思いがした。さらにくわしく知りたく心がけているけれども、ぶつかるのはへまちがえられている方ばかりである。(35)へ・夾城路 句全体ならびに前の句との関係から「城路を夾む」と読む。一説(鈴木氏)に「夾城の路」と読みしてある。三字だけなら、それでも通ずるが、しかし語句の勢いと意味の上では通じない。わたしはじめ「城路を夾む」と読み、鈴木説に接して迷い一時これに従ったが、斎藤注に教えられて安心してものと読みにがえた。なお、廻風舞は郭憲「別国洞冥記」にもとづくであろうことと拙稿「廻風舞」に記した。「残糸曲」の斎藤詩訳は原作の一行を二行にしている。間のびしてしまった感じがする。

「同沈駙馬賦得御清水」(44)は御溝の水を擬人化してうたう。鈴木訳はそれをのみこんだ上でなされた。斎藤訳は、水と詠するへわたしを別のものとしへ幸いにわたしは、この流れめぐってゆく御溝のほとりて、天子の御婦何晏のきみにお目とおひすることができた。Vというのは不可たろう。沈駙馬が沈璧であろうことは拙稿「馮小憐」

「ヒタ」(44)の「螢入暖衣襟」の螢、宣城は花としすぐれる。螢を鵲に対しては平凡でこの一首を平板にする。

「過華清宮」(46)「泉上有芹芽」の芽、宣城本は牙としそれに従うのがよいだろう。拙稿「宮牙」また「蜀王」については「唐の太宗」

「誤悞其二」の後半の誤入が頭には一幅の中も捲かない。まったくむき出しで。それに手取り早く苦い顔で着物を黄いろく染めたというと聞こえは吾しそつだが、さっぱりした野人の服装だ。これでよいのだ。見たまえ。あの清い谷川の魚を、水を飲んできまな自由を樂しんでいるではないか。は鈴本誤よりわかりいい。

「追和柳惲」(p. 53)の「一双鱼」を八二ひきの魚とするのがよい。一双鱼は八男女(一男注)ではなく一双鱼なのだ。拙稿「補悲」

「蘇小小墓」(p. 62)本誌拙稿「蘇小小」の論旨により斎藤説の調子そのものがわたしには取れない。

「綠章封事」(p. 61)難解な作だからやむをえないが「六街馬蹄浩無主、虚空風氣不清冷、短衣小冠作塵土」に対する誤解がのみにくい。鈴木誤もすっきりせぬ。誤文中の八王狗は王狗の誤り。

「河南府試十二月衆詞」については拙稿「十二月衆詩」があるので簡単に。「一月」の「弄」字を入かもし出すと誤するのは不可。「二月」の「勞勞」へごくろうやとびたりせぬ。「生緑塵」は八緑の塵が舞っているすがたではなく、やはり「生」じたのだ。注の八流水 曲名。では不充分で古曲詩をぜひ引いておかねばならぬ。「三月」の「光風転蕙」へうるうると濡れた蕙蘭……とほどういうことか。「飄香」は宣城本に「漂香」とする。八風にひるがえる香りとではなく、ただよい去る香ぐわしい水泡であろう。「四月」の「蟬花」へくしゃくしゃかたまった花ではなく、さっぱり。「驚飛」へ急に移ってゆくのではなく驚字のパスがつかめない。「七月」の程

「青錢」の極は八ひとく太ってしまつたVではなく、極似するのだ。「八月」の「燈垂花」へ燈がパッパッと花をひらいているVではなく、暗くなるのだ。ともしびがうなだれる、とでもいふべきところ。「九月」注「層道」解は八一説Vの方がよいだろうか。「十月」の「着体寒」へぼつたり肌について……Vはいけません。「十一月」の「團圓」宣城本に「團圓」としそれに従わねばなるまい。「泉合」は『樂府詩集』に従つて「氷合」とすべきではないか。「十二月」の「依倚」宣城本は「依倚」

「帝子歌」注(98)へ「明月」……陳本れは宋本によるとして「明月」にしているV「明月」に作るのは蒙古本(四部叢刊)だろう。

「秦王飲酒」(99)については森瀬壽三論文に新説がみえ拙稿「劫灰飛尽」にその感想を記す。この作は……に検討を待っている。

「洛珠直珠」注(100)へ宋本によつた葉葱奇の説に従うV葉の誤、宋本は何なのか。葉のテキスト……の杜撰については興膳宏の書評がすでにいう。

「李夫人」(101)拙稿「夫人飛入瑤瑤台」。「走馬引」(102)拙稿「走馬引」

「南園其七」(103)へおちぶれてVは、おちぶれて、へ「氣嫌Vは、二機嫌、か。

「金銅仙人辭漢歌」(104)拙稿「金銅仙人評漢歌」。「馬詩其十五、十六」(105)拙稿「唐の太宗」。「其二十一」拙稿「楞伽」

「酒罷」注(106)へ潞州の河陽節度使Vの河陽は田義の誤りであろう。

「宮廷歌」(107)へ香を吹いてVは、吹いてではないのか。試文には八吹き出されVとある。

「勉愛行其二」(P₁₄₅)「索米王門一事無」誤入あかみに仕えて禄米をいただくというだけで、わすかの俸給以外に何も無いVをわたしは、生活費ぐらいは取れようかと仕えてみたが、一つだ、てまじなことはなかった、と読みたい。そうしてこの詩はかれの詩職の一つの契機を示すものと考えてる。

「致酒行」注(P₁₄₆)「一至日、長安里中佐」の佐は作の誤り「冬至の日に居安の布中で作る」の居は長の布は里の誤り。

「長歌統短歌」(P₁₄₇₋₁₄₈) 拙稿「長歌統短歌」「唐の太宗」荻森評伝

「愷公」(P₁₄₅₋₁₄₈) 拙稿「愷公」P₁₄₂の「華娥初出座」の挿絵は詩のイメージをこわすようにわたしには感ぜられる。

「草種樹」(P₁₄₂) 拙稿「真徳樹」

「難忘曲」(P₁₄₄₋₁₄₆) この題を宣城本は「難忘曲古詩有君家誠易知復難忘」としそれに従うべきだろう。拙稿「馮小憐」 「馮小憐」(P₁₄₄₋₁₄₆)についても。

「贈陳商」注(P₁₄₀) 八僻遠の地方であれば韻書を重んじて訂正するだろうが、京洛附近なので自分の発言に満足して無関心になっていたのではなからうかVこの詩の韻法についてはまだ子細に検討していないが、これまでに考えた例からいうと賀は韻律に対して二まやかな配慮をめぐらせている。一般的基準を超えるとき、それがかれの特異な意図が送んだのだとまず考えてそれを手掛りにして内的展開を考える方がよい。直衆でも、いわゆる衆曲は公約数にすぎず、すぐれた直衆がしばしば衆曲をのりこえるように、すぐれた詩人の詩は韻典をどびこすのだ。無知で犯すの

ではない。拙稿「十二尊像」「蘇小小」など。

「古鄴城童子謠」(P₂₃₄、235) 拙稿「古鄴城童子謠」なお注の八射田弓Vの田は日の誤り。

「春暉昌谷」(P₂₄₉、250) 「昌谷詩」(P₂₅₀、261) 荻森評伝 拙稿「独吟聯句昌谷詩」

「銅駝悲」(P₂₆₁、262) 拙稿「金銅仙人辞漢歌」, 「自昌谷到洛後門」(P₂₆₁、262) 拙稿「貞新」

「猛虎行」訓八乳孫に乳しV(P₂₇₃)は、孫に乳し、の誤り。

「相勸酒」の「何用強知元化心」(P₂₈₃)の強字の訓がぬけている。

「北中寒」(P₂₉₇、298) 拙稿「北中寒」, 「沙路曲」上之回(P₃₀₄、305) 拙稿「頌歌」

「高軒過」付説(P₃₁₂) 八王保定V王定保の誤り。

「早宮夫人」「蘭香神女詞」(P₃₁₁、312) 荻森評伝

「許公子鄭姬歌」の「長安蜀紙卷明經」(P₃₁₁)について入矢義高書評「金岡照光著『敦煌の文学』」

「經沙苑」の「宮牙」(P₃₄₇) 拙稿「宮牙」

ほかにもないではないが部分的なことはこれ位にしておく。初版発行以後、李賀に関する論文記事は、それ以前とは比較にならぬほど多産であった。そのすべてに目を通すことは無理にしてもその幾分かを精選して本書に組みこんでいたら、第六版『李賀』はさらにわれわれ後進を利益するスタンダード・ハンドブックとなっていたであろう。

荆園斎藤博士は初版を出したとき七十歳、六版のことしは七十八歳。李賀の愛読者が多く、そうであるように、孤独の相貌のこの老詩人の傍には奮然を訂す目をたすけ手をささえる青年がいなかに察せられる。わたしのこの小記があるいは礼を失するところがありはせぬかとおられるが、

後進の敬愛の拙いあらわれと海怨せられるならは幸である。(一九七五年十二月十三日)
斎藤暁には雑誌『俳句』(あるいは『短歌』?)にのった李卓に関する記事があるはずだが、それをわたしはまだ見ていない。
(同日)

明 石 秋 室

一九七五年八月二十五日、弟原田禹雄から『南豊名家詩送』をもらった。

著者兼発行人は大分市稲荷町三百九十二番地大島支郎。大正四年十二月一日豊南書堂発行。

南豊は古より鴻儒碩學、彬彬輩出し、上元祿より、下明治に至る、百八十餘年の間、奎運隆昌、詩詞崛起し、異彩同燦、殊色互妍、眞に近古文學史上に絢爛の光を添へたるなり。然るに方今漢字を識るもの、日に減し月に耗り、その能く詩賦を解するものに至りては、寥寥晨星の如し。是を以て先哲の心血を瀦ぎたる遺書珍籍も、之を保存するもの甚少、或はこれを紙屑を買ふものに附し、或はこれを筐底の蠹魚に奪つて顧るもの無し。今にして蒐集せずんば、後には塵散灰滅、救ふべからざるに至らむと思ひ、慨然として起ち、稟蒐遍搜、多年の日子を費し、漸く三十餘家、壹萬七八千首を獲、更にその中より、典雅、法とすべく、雄渾、誦すべきもの、二十家、壹千四百餘首を選出し、……自ら資を投じて刊行し、……たのがこの本だと「解題」のはじめに記す。解題六ページ、二十名家小伝二二ページ、目次二ペ

ページ、本文三のページ。収める詩人、秋山玉山、三浦梅園、腸蘭室、僧雲華、田能村竹田、帆足庵里、藤瀬淡窓、角田九華、明石秋室、勝田李鳳、中島米華、元田竹溪、劉石舟、藤瀬旭莊、秋月梅門、長梅外、僧五岳、米良東嶺、岡松實谷、長五洲。

このうちの半ばはその集を見、作品を読んでいたが、半ばは未見で、はなはだ興をそそった。読み進んで明石秋室に至って驚いた。中島米華よりも深く李賀に傾倒した人で、米華と同じ佐伯藩に仕えた人ではないか。秋室の名をこのときはじめ知ったが、わたしの無知のみでなく、検索したかぎりの人名辞典のたぐいにこの人を記すものはなかった。いま菅者の小伝とここに収める作品の全部を書き写して置く。漢字表記のみ改め、詩に付した評点、返り点は省略する。

明石秋室 名は肅。字は雨若。通称大助。秋室は其号なり。并築藩の人なり。佐伯藩明石氏子無きを以て、養ふて子となさんとす。秋室曰く、佐伯藩は頗る図書に富む、余をして書物奉行たらしめば、死語せん、他は問ふところに非ずと。佐伯、聞きて之を奇とし、書物奉行と為す。是より群書に涉獵し、学識大いに進む。詩は李長吉を喜び、兼ねて支那時文に通ず。巻を繕き詞評を賦する外、少しも俗事を省ず、而して作る所の書画、及び草稿は庭前の凹所に置き、尽く焼きて曰く、人間の見るべきものに非ず、天帝に上るなりと。故を以て零紙断簡も、容易に需むべからず、人皆争ふて之を珍藏す。安政年中に没すと云ふ。

野遊

一盃自飲一盃酌。古冢前頭倒綠樽。醉臥不知春日沒。野棠如雪照黃昏。

自寫竹

草草逸筆詎為竹。聊將胸懷寄筆端。非个非介隨手抹。是畫是聊任人看。

效吳日千鬼語

朱繡成灰不堪着。漆燈無焰照愁寂。留得當時一玉篇。夜深吹向空山月。

讀昌谷集

搞詞誰逐楚臣奇。細瘦王孫不世才。独憶憂心猶未盡。絳衣俄駕赤蚪來。

讀文長集三首

對明之作已奇奇。述夢二篇幽更悲。解道神仙才鬼語。人間唯有一天池。独与銅人相對哭。吳生模得鬼憤悲。幽冷亦如田水月。棠梨花下踏萸泥。奴視騷壇老主盟。山陰才氣更超倫。勿訝毫端走光怪。隴西長吉是前身。

戲贈

猩紅雨散紅橋晚。細馬嬌嘶風柳斜。蕩郎不省春辭去。日擁青樓解語花。

種竹

養成翡翠置窓紗。坐看濃陰蒼色加。南陌紅塵高十丈。何曾半點到吾家。

南塘

南塘水滿飛雙鷺。桃花點點蘆芽吐。日暮漁童收釣糸。柳条穿得數魚去。

五言絕句

題荷軒壁

花與葉俱香，香露洗愈潔。豈無百草芳，無似此花葉。

竹

削玉一千尺，籊籊本足龍。試看抽尾處，早有碧雲從。

墨梅

墨暈巧顰影，華公何能加。宛然紙窓月，寫出一枝斜。

題伯子紫荷

露華濃於酒，此君終日醉。清風吹不醒，看出琅玕紫。

夜坐

松雲流不止，松月漸無光。夜深石牀冷，松雨滴成香。

七言律

余秋室。東有敗屋一間。家人少到。余獨愛其靜。時偶一蒲席。往坐臥凝塵中。偶有所得。隨筆之。只錄秋夜雨中二首。

松陰戾獸臥苔花。空草沒堪啼蝮蛇。壞榻塵深鼠矢亂。敗簾風度蛛絲斜。老鴉穴棟作精魅。怪樹當檐立夜叉。靜者不嫌荒穢中。來聽寒雨打芭紗。

陰窓兀坐百終夕。青燭不看三蠹花。疎雨滴桐幽響統。孤螢穿竹冷光斜。鮑詩唱罷鬼無語。潘鬢搔來人自嗟。秋室夜深同寂寂。衰燈影暗走無牙。

欲把濃醺相比擬。諸孫風骨出塵氛。一生慕爾誰同我。千載繼騷唯有君。壺氣吹空成繡閣。鬼燐因雨起荒墳。玉樓奇語更多少。除却天人那得聞。奇胸磅礴湧濃雲。叱起阿香駈電輪。荆楚詞臣堪避席。女蘿山鬼好成隣。銅仙悲淚滴鉛水。木魅笑聲飛碧磷。祇使少陵魂喚泣。呖心無語不驚人。

燐

走月沒雲啼怪鴟。寒燐出土灼陰霏。點點猶凝青血色。熒熒爭放漆燈輝。寂埜時速狐火動。荒塋或逐鬼車飛。何如曉鷄鳴喔喔。精魂不語冷光微。

骷髏

觸體枯朽歲年遙。埋却無人委野蒿。濃霧猶垂双眼淚。青苔又長一頭毛。妖狐載去囑何巧。俠客提來飲自豪。知有冤魂消不得。酸風苦雨夜嗷嗷。

柘城

臥狐青塚前頭嘯。怪鵬黑松深裏棲。藤蘿束縛一翁仲。沙上蝕余幾瘞瘳。千年古壘雲旗出。半夜陰風鬼馬嘶。英魂叱咤家魂起。扶得秋聲作鼓鼙。

芭花

尊寵從來只嫩芽。風流誰解愛霜葩。珠苞幾決暗香吐。月瓣漸舒佳色加。葉已有權爭竹葉。花寧無韻敵梅花。清姿宜使水仙侍。笑捧金盃吸露花。

五言律

詠昌谷集